

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
実社会対応プログラム（研究テーマ課題設定型研究テーマ）
評価用研究成果報告書

課題		() 制度、文化、公共心と経済社会の相互連関 (○) 疫病の文化形態とその現代的意義の分析			
研究テーマ名		医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築			
研究代表者	所属機関	慶應義塾大学			
	部局	経済学部			
	役職	教授	氏名	鈴木 晃仁	
委託研究費		単位：千円			
平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度		
5,000	9,500	9,000	3,500		

<p>1. 研究の概要</p> <p>研究目的、研究内容、成果や波及効果等、実施した研究の概要について、簡潔に記述してください。</p> <p>【研究目的】本プロジェクトは、狭い意味での医学という学問領域ではなく、医療という複雑な営みを歴史の研究対象とした。医療は医師だけではなく、医療者、疾病、患者、家族、行政、文化と社会などの多様なプレーヤーを持つ現象である。この医療の歴史を、医学だけでなく人文社会科学の視点も中心に入れて論じることが、現在の国際的な研究動向である。それと同様の研究の方向は日本でも現れている。その方向での人文社会科学の視点から医療の歴史を研究し、その現代的意義を明らかにすることが当プロジェクトの大きな目的である。</p> <p>【研究内容】医療の歴史が持つ複数の側面のうち、感染症のコントロールおよびその記録化と医療と社会・文化との関わり（対話）の二つの側面を選び、二つのグループに分かれてその内容について研究して成果を発信した。感染症は飯島渉（青山学院大学）、対話は鈴木晃仁（慶應義塾大学）がそれぞれ主導する二つの研究グループに分かれて行った。感染症グループは医学史研究の基盤となるアーカイブズを整理して、医療者、歴史学者、行政関係者など、多様な専門家と一般市民がアクセスできる感染症アーカイブズを整備した。対話グループは、医学史の研究成果を一般の人々に発信するウェブサイト「医学史と社会の対話」を公開するとともに、音楽や芸術と結びついた企画を立案及び取材をした。</p> <p>【成果と波及効果】感染症グループと対話グループのいずれも、通常の学術的な研究成果とは異なった実践と発表の場を作り出した。学会発表や学術論文、学術書の刊行なども行いつつ、それぞれの主題と医療、行政、社会と文化との関係を積極的に問うて発信した。医療の歴史の現場に立って思索し実践するというローカルな手法を取る一方、その成果をウェブサイトから発信するというグローバルな手法も取った。それによる波及効果を客観的に示すことは難しいが、「医学史と社会の対話」のアクセス数には順調な増加が記録されており、この傾向を持続させたいと考えている。</p>
--